

科技高 いきものの記

Vol.66 2022.11.25

生物教員 佐藤龍平

まさかいるとは！希少な水生昆虫 ミズカマキリとコオイムシ

Vol.65で紹介した通り、猿江恩賜公園の池にはウシガエルやアメリカザリガニなどの外来生物が生息していて、そのあまりの数の多さに驚きを隠せなかった。だが、実は、**逆の意味で度肝を抜かれた出来事もあった**。かいぼりの見学に行った時、アイザワさんが外来種が入っていたものとは異なる昆虫飼育ケースを見せてくれたのだ。「これ、この池で見つかったミズカマキリとコオイムシです。」そう言われて耳を疑った。「え！？！？この池にミズカマキリいるの？！コオイムシも？！」外来種が蠢くこの猿江公園の池に**なんと絶滅危惧種に指定されている希少な水生昆虫が生き残っていたのだ**。驚きのあまり叫びそうになった。（というかたぶん叫んだ。）

我々の親世代に聞けば、「そんな学校のパールにもいたわ」と言う人もいるだろう。しかし今や、ミズカマキリもコオイムシも生息場所となる水辺環境が激減して、東京23区では**絶滅危惧ⅠB類**に指定されている。もちろん、自然度の高い地域では、今なお学校のプールで見られるほどたくさんいるだろうが、この辺りではほとんど見ない。（都会育ちの私は飼育個体や標本以外でミズカマキリの生きた実物を初めて見た。）

ミズカマキリもコオイムシも、広い意味ではカメムシの仲間だ（半翅目という）。カメムシの仲間は、なぜだか水辺の環境に適応した種類が多くいて、この2種の他にも**タガメ**や**アメンボ**、**タイコウチ**なんかも全部カメムシの仲間だ。今回見つかったミズカマキリとコオイムシは、どちらも**前脚をカマ状に進化させ**（カマの取れん進化についてはVol.41参照）、**お尻の先を水面に出して呼吸する**。水中生活に適応して進化した独特な形状がとても格好良くて美しい。

ただ、今回のかいぼりではバケツにいっぱいになるほど大量の外来生物が見つかった一方で、ミズカマキリは2匹、コオイムシは1匹だけだった。おそらく、この池の中での個体数は相当少ないだろう。はたして来年も、再来年も、この池でこの虫たちに出会うことはできるのだろうか。現状ではかなり厳しいだろう。彼らの将来を決めるのは、われわれ人間のこれからの行動次第であることを絶対に忘れてはならない。



猿江恩賜公園のミズカマキリ *Ranatra chinensis*

東京都ランク：絶滅危惧ⅠB類

体長4cmほどの細長く大型の水生昆虫。カマキリのような見た目だが、カメムシの仲間だ。今回のかいぼりで計2個体発見された。前脚がカマ状になっていて、このカマで獲物を捕らえ、針状の口で体液を吸う。



猿江恩賜公園のコオイムシ *Appasus japonicus*

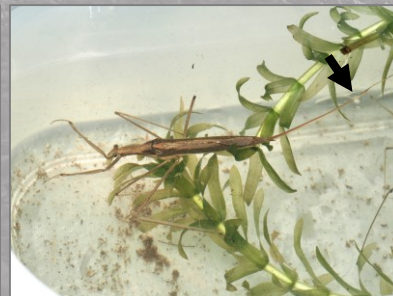
東京都ランク：絶滅危惧ⅠB類

体長約2cm。タガメをぎゅっと縮めて丸っこくしたような姿をしている。メスのコオイムシはオスの背中に卵を産み付ける。オスが子を背負うので「コオイムシ（子負い虫）」と呼ぶ。オスが子を保護するという、昆虫としては非常に珍しい習性をもつ。



ミズカマキリの全身

からだ全体が非常に細長い。体長と同じくらいの長さの尾（呼吸管）を持つ。アメンボのような形をしているが、水面に浮かぶのではなく、沈んで獲物を捕らえる。ただし、長い尾の先端だけは水面に出している。



お尻の先を水面に出して呼吸するミズカマキリ

長い尾の先だけを水面に出すことで、空気を取り込み呼吸する（矢印）。水生昆虫ならではの独特な呼吸方法だ。



お尻の先を水面に出すコオイムシ

ミズカマキリのように長くはないが、コオイムシもお尻の先を水面に出して呼吸する（矢印）。からだ全体は楕円形で平べったい。コオイムシもカマで獲物を捕らえて体液を吸う。